



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

## 白川村におけるグリーン・ツーリズムの研究

|       |                                                                                                                                            |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-06-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 大野, 功仁郎, 杉山, 道雄, 有本, 信昭, 荒幡, 克己,<br>チアニ, アドリアノ<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/5855">http://hdl.handle.net/20.500.12099/5855</a>                                              |

## 白川村におけるグリーン・ツーリズムの研究

大野功仁郎・杉山道雄・有本信昭\*・荒幡克己・アドリアノ チアニ\*\*

生物生産制御学講座

(1998年7月16日受理)

## A Study on Green Tourism in Shirakawa Village, Gifu Prefecture, Japan

Koujirou OHNO, Michio SUGIYAMA, Nobuaki ARIMOTO\*,

Katsumi ARAHATA and Adriano CIANI\*\*

*Department of Production and Distribution Management*

*(Received July 16, 1998)*

### SUMMARY

Green Tourism (G.T) is defined as "leisure activity with nature, culture and rural people at a rural village." G. T has advanced more in Europe than Japan; the number of days stayed in Europe (Ex: Italy) was 5 to 7 days, while the number of days in Japan was 1.7 days. The purpose of this study is to clarify and find ways to increase the number of days visitors stay in rural areas. In order to do this, Shirakawa village, which has a traditional culture combined with nature in a mountaneous area, and the "Gasho House," the typical Shirakawa residence, were selected. In this study, 258 rural tourists and 215 soba processing plant visitors were surveyed.

The visitors said they would like to increase their stay and stay in a farmers' inn with "Irori" (traditional fireplace), and help farmers with house roofing and making roofing materials. This survey revealed that the soba processing plant visitors who experienced soba making, wanted to grow buck-wheat and assist in harvesting during their stay. However, at present, the number of leisure days in presentday Japan does not permit a long vacation for working-class people.

It is important to prepare comfortable farmer's inns while preserving original nature and culture, in order to attract visitors and thus encourage them to stay longer. Some-day visitors returning should be civil and not disturb the privacy of rural households.

Res. Bull. Fac. Agr. Gifu Univ.(63) : 97-104, 1998

### 要 約

グリーン・ツーリズム (以下GTとする) は「農山村において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ余暇活動」と定義されている。GTはヨーロッパで発達し、それらの国民の宿泊日数 (以下宿泊数とする) は5~7日であり、日本の1.7日に比べると大変長い。本研究の目的は、農村地域における宿泊数を増加させる手段を明らかにする事である。そのために、山地で自然と結合した伝統文化や、「合掌家屋」を持つ白川村を調査地として選んだ。本研究では、白川村の民宿利用者258人と、「そば道場」の利用者215人をアンケート調査した。

\*岐阜大学地域科学部 : Faculty of Regional Studies, Gifu University

\*\*ペルーシア大学農学部 : Faculty of Agriculture, University of Perugia

keywords : 農村観光 (Rural Visitor), グリーン・ツーリズム (Green Tourism), 合掌家屋 (Gasho house), そば道場 (Soba Processing plant)

民宿利用者は滞在期間を今以上に伸ばし、囲炉裏のある農家民宿に宿泊し、合掌家屋の屋根のふき替えやその材料となるカヤの栽培に参加したいと考えている事が明らかになった。また、そのような意向はそば打ちを体験したそば道場の利用者にも見られ、彼らは滞在中にそばの栽培や収穫を手伝いたいと考えている。しかし現在のところ、日本では勤労者が長期休暇を取得することは保証されていない。

観光客を引きつけ、滞在期間を伸ばすために、地域固有の自然や文化を保全し、快適な農家民宿を整備することが重要である。また、日帰り客は公衆道徳を守り、農村住民のプライバシーを侵害しないようにする事も必要である。

## 1. はじめに

近年、過疎化の進行する農山村において、グリーン・ツーリズム（以下GTとする）を中心とした都市と農村の交流事業が推進されている。すでに1995年4月1日からは、農山漁村での余暇活動推進のための基本方針や滞在施設の整備等を盛り込んだ「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」（農山漁村滞在型余暇活動促進法）が施行され、都市農村交流事業の体制強化が始まっている。これにより「全国農林漁業体験民宿業協会」に登録された「体験民宿」は、98年8月の段階で全国で880軒にのぼり、農家民宿を中核施設として農業と観光の接点が模索されている。

GTは、ドイツ、イタリア、フランスなどの西欧諸国で早くから導入されている。それら西欧諸国のGTと日本のGTには、その歴史、推進方法、概念において、いくつかの違いがみられる。西欧諸国でGTが本格的に普及したのは第2次世界大戦後であり、現在では、行政の助成処置や農家民宿の組織化により、農村住民によるビジネスの一つとして定着している。一方、日本では従来から様々な都市農村交流が市町村や個人レベルでなされてきたが、その推進方策に統一性が無く、体系化されていなかった。国の政策として上記のような体制が整備され始めたのは90年代に入ってからであり、行政主導のトップダウン型が一般的である。さらに日本で一般的にいわれているGTの概念は、西欧諸国のそれに準じたものであり、日本の現状に即していない。例えば、農水省の「GT研究会」の報告<sup>1)</sup>では、GTを「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」略言すれば、「農山漁村で楽しむゆとりある休暇」と定義しているが、日本型GTの特徴としては不明確さが残る。実際、国民1人当たり1回の宿泊旅行（国内）における平均宿泊数は1.7泊<sup>2)</sup>（1996年）であり、「ゆとりある休暇」とはいえない。また、GTの舞台が農村住民にとっての生活の場であることへの観光客の認識不足と、観光地側のガイド・PRの不足も問題である。従って、GTを概念しその実践を考えると、その提供者側及び利用者側の現状に即した推進方策を十分に考慮するべきである。

本研究では、農村の観光客の宿泊数を増加させる手段を明らかにすることを目的とした。研究方法として、①農村文化保存運動を観光と結びつけ、農村文化や自然を観光資源として保存することに成功した岐阜県白川村荻町の合掌集落を取り上げ、②その観光地としての位置付けを「岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書」<sup>3)</sup>を基に他の市町村との比較から明らかにした。③その上で、1997年8月から10月の3ヶ月間に渡って、白川村荻町の合掌民宿利用者258人と、そば作り体験施設「そば道場」の利用者215人を対象に筆者らが行った「荻町合掌集落観光客アンケート調査」（以下、「アンケート」とする）を用い、観光客の宿泊行動を促す原因の分析と宿泊客獲得のための施策の考察及び、観光客のGTに対する意識分析を試みた。アンケートの分析に際しては、回答者をその年齢別（30歳未満、30,40歳代、50歳以上）に数が均等になるように3層に分け、宿泊の有無別に2分することにより、全体で6グループに分け、それぞれにおける傾向を分析した。なお、アンケートの配布数は民宿296部、そば道場500部で、回収数は民宿のみ利用170部、そば道場のみ利用127部、民宿とそば道場両方利用88部、計385部である。以下で日帰り客と呼ぶのは、そば道場のみ利用した者で127人、宿泊客と呼ぶのは民宿及びそば道場を利用した者で258人のことである。

## 2. 白川村の観光

### (1) 白川村のグリーン・ツーリズム提供者としての性格

調査対象地区となった白川村荻町合掌集落は、岐阜県の西北部に位置し、白山(2,700m)を主峰とする険しい飛騨山地に囲まれ、冬季は積雪2mを越えるなど、生産・生活面で限界地に近い奥地山村である。村の総土地面積のほとんどが山林であり、耕地面積はわずか0.5% (178ha) にすぎない<sup>4)</sup>。そのため、集落は農業以外の収入源を第2次、第3次産業へ求めている。特に観光業は第3次産業の45%を占め重要視されている。

白川村の観光は1960年からの「御母衣ダム見学」に始まり、しだいに村内の「合掌集落見物」へと変化していった。しかし、高度経済成長期に入ると、若者の流出や集団離村により合掌造り家屋の減少が続いた。そうした中、荻町地区では合掌家屋を利用した民宿経営を中心に集落保存運動が展開され、71年には「荻町集落の自然環境を守る会」(以下「守る会」)<sup>5)</sup>が結成された。また、「守る会」は、「(合掌家屋、屋敷、農耕地、山林、立木等を)売らない、貸さない、壊さない」の「3ない原則」をうたった「住民憲章」<sup>6)</sup>を採択した。そうした運動により、76年には文化庁の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、集落景観の保全に国からの補助金が得られるようになった。また、87年には「合掌基金制度」も設けられ、国の補助から漏れた修景作業の費用支援が可能となっている。このような住民主体による集落保存運動により、合掌集落は今日まで保存され、奥地山村にも関わらず、多くの観光客が訪れる観光地となった。そして、1995年12月に荻町の合掌造り集落が「ユネスコ世界文化遺産」<sup>7)</sup>に登録されたのを契機に観光客が急増し、96年には観光客総数が100万人を越えた(図1)。白川村の主な観光資源には、「荻町合掌集落」の他にも、「御母衣湖」、「旧遠山家民俗館」、「平瀬温泉」、「白山国立公園」などがあるが、最も集客力の高いのは「合掌造り民家園」、「ふるさと体験館」、「明善寺郷土館」などがあり「合掌造りの里白川郷」として世界的に有名な「荻町合掌集落」であろう。

白川村の観光が本格化した1960年代以来、白川村の観光客総数は一時的な減少はみられたもののおおむね増加を続けてきた。しかし、その内訳をみると、伸び続けているのは日帰り客であり、宿泊客は80年以降10万人前後で停滞してきた。そのため、総観光客に占める宿泊客の割合は年々減少し続け、世界遺産登録後2年を経た97年では、その割合は9%と過去最低まで落ち込み、日帰りや通過型の観光客が9割を占めるようになった。この宿泊客割合の減少を観光地の性格としてみると、白川村はどういった性格をもつ観光地なのかを検討しよう。

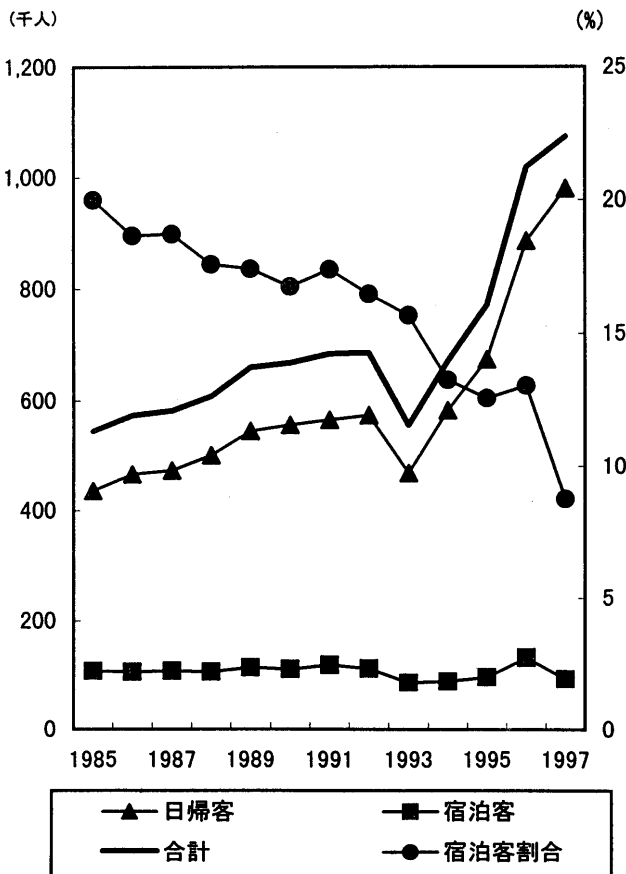


図1. 白川村の観光客数の推移

録後2年を経た97年では、その割合は9%と過去最低まで落ち込み、日帰りや通過型の観光客が9割を占めるようになった。この宿泊客割合の減少を観光地の性格としてみると、白川村はどういった性格をもつ観光地なのかを検討しよう。

## (2) 白川村観光の特徴

岐阜県の95市町村を、その宿泊客割合の高い順に並べると、トップの上之保町83%から、0%の市町村までその差は大きい。宿泊客割合が比較的高い市町村についてみると、キャンプ場や温泉などの観光資源を持っている場合が多い(表1)。また、宿泊客割合が皆無という市町村は、主要都市やその近隣の市町村に多く、行催事や公園、遊園地を観光資源としていることが多い。このように、宿泊する事自体が目的となっていなければ、交通網の発達と共に日帰り客割合の高い通過型の観光地へと移行しやすい。ただし白川村の場合、その観光資源は地域住民が普段生活及び生産の場として利用している農村集落であり、その生活文化そのものである。その点でスキー場やキャンプ場、温泉、行催事、公園などの観光資源を持つ観光地とは性格が異なる。また、スキー場などのス

表 1. 宿泊客割合順にみた市町村の特徴 (単位:千人)

| No. | 市町村名 | 宿泊客割合 | 総観光客数 | 主な観光資源        |
|-----|------|-------|-------|---------------|
| 1   | 上之保町 | 83%   | 6     | キャンプ          |
| 2   | 下呂町  | 76%   | 2048  | 温泉            |
| 3   | 上宝村  | 66%   | 1528  | 温泉            |
| 4   | 高山市  | 43%   | 2297  | 名所旧跡          |
| 5   | 加子母村 | 42%   | 111   | キャンプ          |
| 25  | 白川村  | 13%   | 771   | 自然景観観賞        |
| 91  | 関ヶ原町 | 0%    | 768   | 公園・遊園地        |
| 92  | 多治見市 | 0%    | 768   | 行催事           |
| 93  | 大垣市  | 0%    | 894   | 行催事           |
| 94  | 可児市  | 0%    | 1916  | 行催事(花フェスタ'95) |
| 95  | 平田町  | 0%    | 2013  | 神社仏閣          |

注) 宿泊客割合が同率の場合、総観光客数の少ない順に順位付けした。ることからも明らかである。

スポーツ施設を持つ観光地が、宿泊客の日帰り客化により、その宿泊客割合を低下させてきたのに対し、ある程度一定の宿泊客を確保しつつ日帰り客が増加している点でも白川村は特徴的である。また、今後、日帰り客が宿泊客へ変化する可能性もたふんにあり、その点も特徴的である。それについては観光客の意識調査から明らかになるであろう。尚、宿泊客割合を増加させる経済的メリットは、村自体に落とす観光客の消費全額が1人1日当たり数千円から1万円前後に跳ね上がる

(3) 「荻町アンケート」から宿泊客割合を増加させるカギを探る

1) 観光客アンケート回答者のプロフィール

回答者は、女性が58%、男性が42%であり、20歳代が3割弱で最も多い(表2)。地域別には、愛知県や岐阜県、石川県、静岡県等の比較的近県からの来訪者が多く、次いで東京都や神奈川県、埼玉県、千葉県等の関東地方や、大阪府や京都府、兵庫県といった近畿地方からの来訪者が多い。約7割が初めての来訪客で約3割が2度目以上である。同行者別には、職場や学校による団体旅行者が3割を占めるのに対し、友人や夫婦・カップル、家族、一人で来たという少人数の旅行者が約7割を占めている。滞在時間は平均表2. 回答者のプロフィール

|      |                                                                                    |
|------|------------------------------------------------------------------------------------|
| 性別   | 男(42%)、女(58%)                                                                      |
| 年齢   | 20歳以下(2%)、20代(29%)、30代(18%)、40代(18%)<br>50代(14%)、60代(17%)、70歳以上(3%)                |
| 職業   | 会社員(34%)、主婦(17%)、公務員(16%)、学生(9%)<br>自営業(6%)、無職(6%)、パート(6%)、自由業(2%)、その他(4%)         |
| 居住地  | 中部45%、関東27%、近畿20%、中国4%、九州2%、東北1%、四国1%                                              |
| 訪問回数 | 初めて(71%)、2回目(17%)、3回目以上(12%)                                                       |
| 同行者  | 団体(30%)、友人と(29%)、夫婦・カップルで(22%)、家族と(15%)、一人(2%)                                     |
| 滞在形態 | 日帰り客(32%)、宿泊客(68%)                                                                 |
| 滞在時間 | 平均16.8時間 (最小1.5時間 最大55時間)                                                          |
| 交通手段 | 自家用車(62%)、貸し切りバス(13%)、定期バス(10%)、レンタカー(7%)<br>マイクロバス(5%)、タクシー(1%)、オートバイ(1%)、その他(1%) |

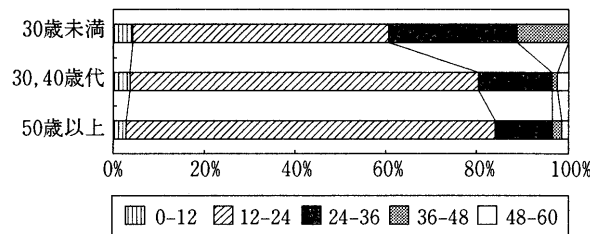


図 2. 宿泊客の年齢層別の滞在時間

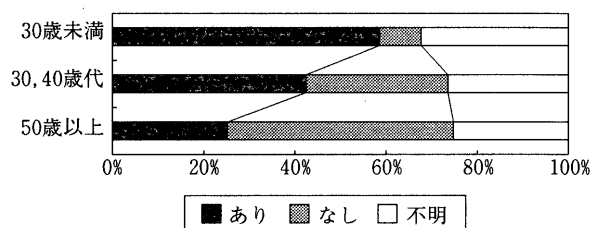


図 3. 日帰り客の長期滞在への意向

16.8時間、最小で1.5時間、最大で55時間で、宿泊客の9割以上が1泊の宿泊である。

2) 日帰り客と宿泊客の違い

さて、宿泊客割合を上げるための手段としては宿泊客数を増加させることが挙げられるが、ここ10年

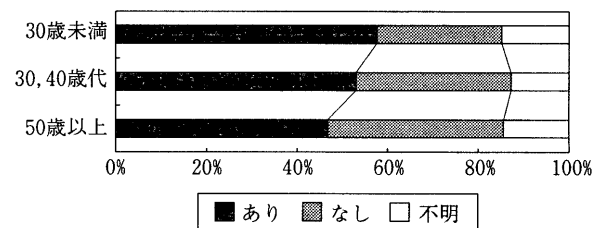


図 4. 宿泊客の長期滞在への意向

ほど宿泊客数の変化がほとんどないことから、1人当たりの滞在時間あるいは宿泊数を伸ばす方が現実的だと思われるし、GTとしてもふさわしい。1人当たりの滞在時間あるいは宿泊数をのばすには、まず観光客に滞在時間を伸ばす意志があるかを調べる必要がある。その上で、宿泊客が集落観光に何を望んでいるかを知る必要性が出てくる。

宿泊客の滞在時間を年齢別にみると、低い年齢層ほど24時間以上滞在した客が多く、30歳未満においては、36時間以上の滞在も約1割存在する(図2)。さらに、30歳未満及び30,40歳代においては宿泊の有無を問わず半数近くが、さらに数日滞在を延ばす意志があると答えた(図3, 図4)。それに対し、50歳以上の日帰り客の長期滞在への意向は同じ年代の宿泊客の半分と少数であった。

### 3) 長期滞在行动を促進するもの

白川村の観光客の平均滞在時間は日帰り客の増大により下降しているが、一方で観光客は現状よりも出来るだけ長く滞在したいという意向を持っている。その意向を実際の行動に移すために、村はどのような体制改善を行えばよいのだろうか。それは、観光客が合掌集落に何を求めているかにヒントがある。

アンケートでは合掌民宿の宿泊客の半数以上が「民宿の人とのふれ合い」を強く求めている。また、宿泊客の約7割以上が「火のついた囲炉裏を囲んでの食事」を望んでおり、中でも30歳未満の宿泊客は8割以上がそう答えている(図5)。さらに、宿泊客の約8割が「白川郷でまた宿泊したい」と答えており、合掌民宿を文化交流の場としてとらえていると考えられる。

村内の体験型レクリエーション施設であるそば道場はその利用者のほぼ全員が「楽しかった」と答えて

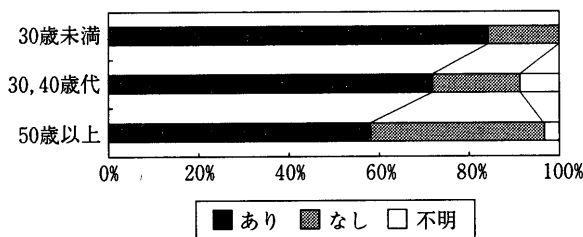


図5. 囲炉裏を囲んでの食事への意向

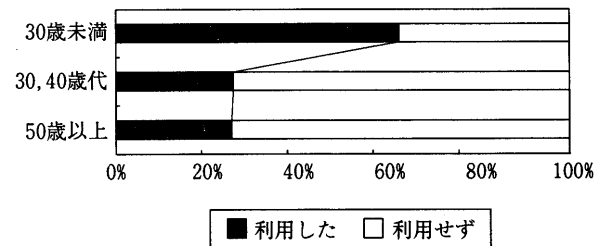


図6. 宿泊客のそば道場利用状況

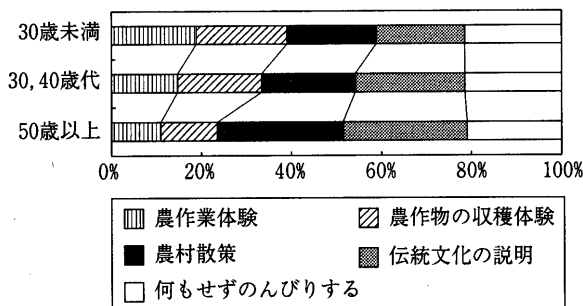


図7. 新しいレクリエーションへの年代別の意向

体験型のレクリエーションは低い年齢層に人気があり、逆に農村文化を見たり聞いたりする見聞型のレクリエーションは高い年齢層に人気があった(図7)。なお、全体の約2割が「何もせずのんびりする」ことを望んでいる。

## 3. グリーン・ツーリズムの実践

荻町の観光客は荻町が人の住む観光地であることをどの程度認識しているだろうか。以下に年代及び宿泊の有無別の傾向分析を行った。

### (1) 集落の景観維持への観光客の意識

ゴールデンウィークや夏季の週末など観光客の集中する時期は、集落内への一般車の乗り入れがとくに

おり好評である。また、特に30歳未満の観光客に人気がある(図6)。

またアンケートでは、いくつかのレクリエーションを提案している。列举すると、「合掌家屋の屋根の葺き替え」、「農作業体験」、「農作物の収穫体験」、「案内人付きの農村散策」、「伝統文化の説明」、「屋根の材料であるカヤの見学」であるが、中でも農村文化を体験する

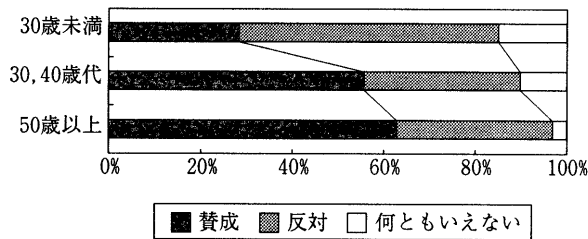


図 8. 日帰り客での車の乗り入れの賛否

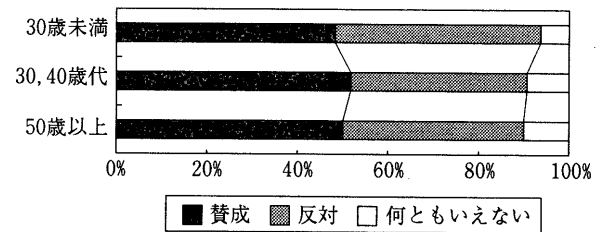


図 9. 宿泊客での車の乗り入れの賛否

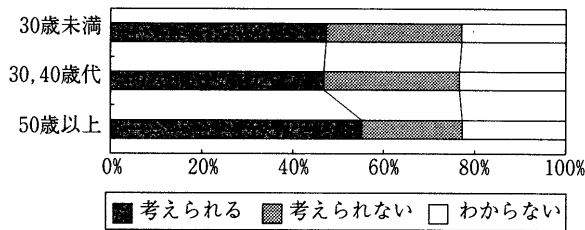


図10. 日帰り客の景観維持費用負担

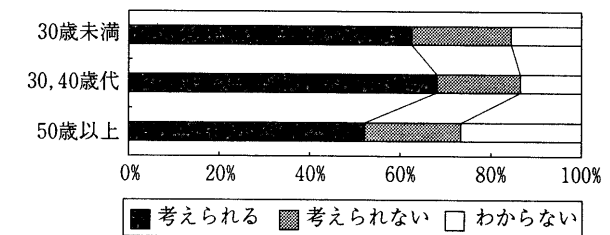


図11. 宿泊客の景観維持費用負担

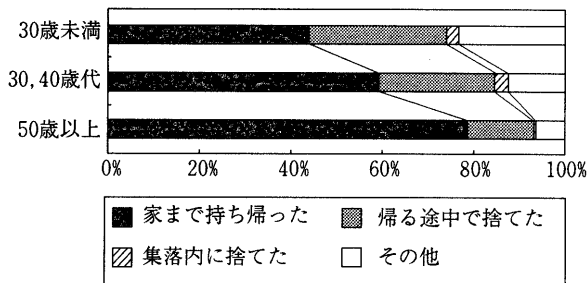


図12. 日帰り客のゴミ捨て状況

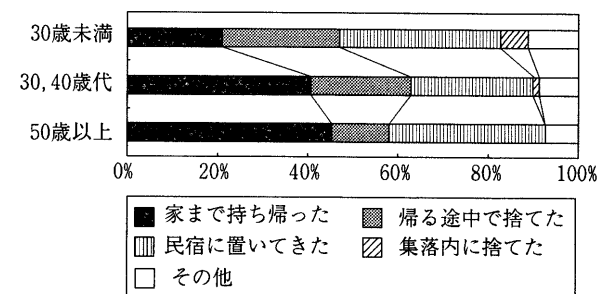


図13. 宿泊客のゴミ捨て状況

多く、直接観光業に携わらない住民への影響は大きい。しかし「一般車の乗り入れ制限」を行うことに対し、特に30歳未満の日帰り客に抵抗が強く、年代による意見の相違が顕著であった(図8, 図9)。

集落の景観は集落の住民によって維持管理されているが、最近の観光客急増により住民だけで維持管理するのは困難になっている。例えば、アンケートでは集落の景観維持費用を観光客が一部負担することが「考えられる」とした人は、比較的宿泊客で多く、日帰り客に比べ景観維持への関心が高いことがわかる(図10, 図11)。今後は観光客も、積極的に集落の景観維持に協力していく姿勢が求められる。また、観光客のゴミ処理の状況は、日帰り客、宿泊客共にゴミを家まで持ち帰った人は年齢が低い層ほど少なかった。特に30歳未満の宿泊客においては、「集落内に捨てた(6%)」、「民宿に置いてきた(37%)」人の割合が他の年齢層に比べ多く、ゴミを家まで持ち帰った人は20%ほどである(図12, 図13)。

## (2) 合掌集落の特質と観光客の意識

合掌家屋は木造で屋根が茅葺きであるため大変火に弱いという特質を持つ。そのことに対する観光客の認識度は、宿泊客において100%近いが、30歳未満の日帰り客の約2割に認識不足がみられた(図14, 図15)。

集落内には、一般に公開していない合掌家屋も多数存在するが、そのような家屋へ観光客が勝手に入り

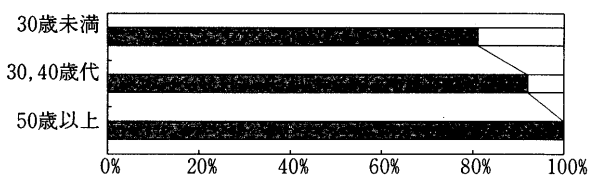


図14. 日帰り客の合掌家屋の特質への認識度

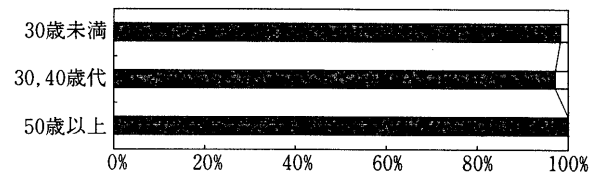


図15. 宿泊客の合掌家屋の特質への認識度

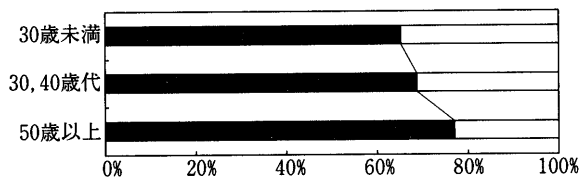


図16 日帰り客のプライバシー認識状況

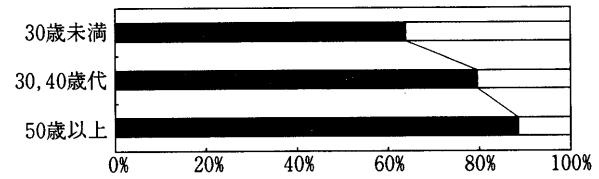


図17 宿泊客のプライバシー認識状況

込んで写真を撮ったり、家の置物を持っていってしまうというプライバシーの侵害が、頻繁に起こっている。アンケートでは全体の6割以上が「観光客には集落住民のプライバシーを守る義務があるのを知っている」と答えたものの、日帰り客と宿泊客に共通して、低い年齢層で認識度の低いことが明らかになった(図16, 図17)。

### (3) 観光客への対応策

世界遺産登録後増え続ける観光客に対し、何らかの対策が必要となってくるであろう。例えば、「集落内への一般の車の乗り入れを制限するかどうか」という問題に関しては、集落外の駐車場で一般車を止め、観光客はそこから徒歩、または公営の「集落内送迎バス」を使って、集落内に入るなどの方式を導入し、集落内は徒歩か、集落内を循環している「集落内送迎バス」を利用して移動するような方式が推奨される。

「火の管理」や「プライバシー」の問題は、観光客側の姿勢にゆだねられている。具体的な対策としては、①レクリエーション施設(民宿を含む)での住民からの口頭説明を徹底する、②先に提案した「集落内送迎バス」の移動時間を、集落の歴史などのPRと併せ観光ガイドの場とする、③ビジターセンターを設置し、説明する機会をつくる、などが考えられる。

## 4. 結果及び考察

GTの舞台となる農山村には、人々の様々な生活活動があり、朝昼晩と時間によりその表情を変える。わずか数時間の滞在ではその一面しか見られないため、GTにおいては、長期滞在が勧められるのである。アンケートからは今後低い年齢層を中心に滞在時間を伸ばす動きが出てくると思われるが、すでにそういった意識に基づいた滞在時間の延長も起こっていると思われる。また、観光客は単に合掌集落に宿泊して囲炉裏文化を楽しむだけでなく、屋根のふき替え、カヤの刈り取りに参加することを望んでおり、今以上に民宿を文化交流施設として活用すると良いのではないだろうか。そば道場においてはソバ打ち体験に参加するのみではなく、そばの刈り取りや調整、さらには栽培への参加を望んでいる。そのような意向を上手くみ取ることによって、観光客の滞在時間は伸び、観光客により深く農村を理解する機会を提供することになるだろう。

アンケートから、低い年齢層の日帰り客は長期滞在への意向は強いが、住民の生活をあまり意識していないといえる。また、日帰り客と宿泊客では、観光行動はもとよりGTに対する意識まで異なる。現在、村当局はどんな観光客に対しても画一的な対応をしているが、観光客はその年代や滞在形態などにより多様化していることに留意しなければならない。GTへの意識改革を観光客に任せるのではなくサービスの提供者側が積極的にガイドPRを行う必要があるだろう。

日本のGTは始まったばかりであり、サービスの利用者側も提供者側も未熟な状態だといえる。利用者は宿泊数(滞在時間)を伸ばしたいという意向を持っているが、有給休暇の取得が制度的にも慣習的にも十分保証されていないなどの理由により、実際には容易ではない。観光地側には西欧諸国のGTの概念が浸透しつつあるが、実際には日帰り客や通過型の観光客を対象にした観光整備を優先させている。しかし、GTは大量の入り込み客を期待するものではなく、量より質を重視するものでなくてはならない。したがって観光地側の対応はGTの第1段階にあると見なせよう。今後は、宿泊客を対象とした観光整備を行い、日帰り客を宿泊客へ変えていく体制の改善により、第2段階へと進むことが可能となるだろう。



## 注 及 び 参 考 文 献

- 1) (財) 21世紀村づくり塾：グリーン・ツーリズム。全新企画社：1-11,1992.
- 2) 総理府：平成8年度版観光白書。大蔵省印刷局：26,1996.
- 3) 岐阜県企画部観光課：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書。1995.
- 4) 依光良三・栗栖祐子：“グリーン・ツーリズムの可能性”：66-83, 日本経済評論社。1996.
- 5) 荻町の住民153名(1971)が会員として参加。(概略)先祖から受け継いだ荻町集落の美しい自然と素朴人情に包まれた合掌集落の環境を保護し、長く次代に継承、住み良い郷土を保持し、もって住民の生活安定を図り、地域振興の促進に努めることを目的とする。また、事業内容は、①荻町集落周辺及び自然環境の保存に関する事、②荻町地区内の現状変更の統制に関する事、③その他目的達成に必要な事、である。
- 6) 白川村荻町集落自然環境を守る住民憲章。(概略)荻町集落の自然環境を守るために、地域内の資源(合掌家屋・屋敷・農耕地・山林・立木等)について「売らない」「貸さない」「壊さない」の3原則を守り、以下のことに留意する。①建物の色の統一②看板、広告の規制③集落及び自然景観への配慮④合掌家屋への文化財としての認識と保存への努力⑤風習や伝統芸能の継承
- 7) 「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(1972年ユネスコで採択、75年国際条約として発効)により、世界各国の中でもとりわけ顕著な普遍的価値を有すると認められるものをいう。
- 8) 佐藤誠：“リゾート列島”：岩波書店、1991.
- 9) 山崎光博・小山義彦・大島順子：“グリーン・ツーリズム”：家の光協会、1993.
- 10) 井上和衛・中村攻・山崎光博：“日本型グリーン・ツーリズム”：都市文化社、1998.
- 11) 農政ジャーナリストの会：“グリーンツーリズムの胎動”：農林統計協会、1997.
- 12) (財) 21世紀村づくり塾：“日本型グリーン・ツーリズムの創造1”：全新企画社、1994.
- 13) 大江靖雄：日本型農家民宿の展開に関する一考察。近畿中国農業研究90：38-43,1995.
- 14) 大江靖雄・Adriano CIANI：イタリアにおけるアグリツーリズムの現段階とその経営活動。日本観光学会誌28：48-59,1996
- 15) 大江靖雄：グリーン・ツーリズムの現段階と展開条件。中国農試農業経営研究資料117：15-35,1995.
- 16) 大江靖雄・Adriano CIANI：わが国民宿農家とイタリア・アグリツーリズム農家の活動と意識に関する比較分析。日本農業経済学会論文集：135-138,1996.
- 17) 白川文化フォーラム'92実行委員会：“こころの散策”：西濃印刷株式会社、1997.
- 18) 岐阜新聞社出版局：“世界遺産の合掌造り集落”：西濃印刷株式会社、1996.
- 19) 総理府：観光白書1990, 1992, 1996年版。大蔵省印刷局：1991,1993,1997.
- 20) 持田紀治：芸北高原におけるグリーン・ツーリズムの基本方策。グリーン・ツーリズムモデル整備工創作提示業専門委員会調査報告書、1996.
- 21) 広島県芸北町：グリーン・ツーリズム計画。広島県芸北町、1996.
- 20) 桂瑛一：“カントリーウォーク”：新葉社、1997.
- 21) 未武直義：“観光論入門”：法律文化社、1978.
- 22) 持田紀治：グリーン・ツーリズムの課題と展望。地域農林学会発表報告集：43-59,1997.
- 23) 大江靖雄：グリーン・ツーリズムの現段階と展開条件－農家民宿を中心に－。中国農試経営研究資料117, 20-35, 1995.
- 24) Edmund M. Tavernier, Adesoji O. Adelaja and Maurice P. Hartley: Agri-tourism as an Income-based Strategy for Farm Operators. Journal of the ASFMRA. 52-59, 1997.